

プログラムを読む ——デリダによる生物学の脱構築¹

フランチェスコ・ヴィターレ

(訳 = 吉松覚)

ジャック・デリダの『生死』講義（1975-76年）での、フランソワ・ジャコブの『生命の論理』の読解は明らかに、『グラマトロジーについて』（1967年）で展開された以下のような仮説を検証することへと差し向けられている。

また、まさにこの意味において、現代の生物学者たちはエクリチュールとプログラムとを、生きている細胞における情報の最も基本的なプロセスとの関連で語るのである。そして結局のところ、それに本質的な限界があろうとなかろうと、サイバネティクスの意味でのプログラムに覆われた領域全体が、エクリチュールの領域となるだろう。サイバネティクスの理論がそれ自体、近年まで人間と機械とを隔てるのに役立ってきた一切の形而上学的な諸概念——そこには魂、生、価値、選択、記憶などの概念も含まれる——を排除しようとする

¹ 本論は、私の著書『生脱構築——ジャック・デリダと生命諸科学』（2018年、ニューヨーク市立大学出版局より出版）の素材を再編集したものである。これは、1975年にパリの高等師範学校でデリダが『生死』と題して行い、一部未刊行であったセミナーの読解が基盤となっている。本論の痕跡は、私が最近発表した他のエッセイにも散種されている。Vitale, “Conjuring Time : Jacques Derrida between Testimony and Literature,” *Conjurations*, special issue of Parallax, vol. 17, no. 1, 2011, pp. 54-64, “Via rupta : vers la biodeconstruction,” *Appels de Jacques Derrida*, edited by Danielle Cohen-Levinas and Ginette Michaud, Hermann, 2014, pp. and “The Text and the Living” [「テキストと生物——生物学と脱構築のあいだのジャック・デリダ」小川歩人・西山雄二訳、『人文学報』512-15号、首都大学東京人文科学研究科、2016年、167-190頁] を参照。

のだとしても、この理論は自らの歴史的－形而上学的性格が明らかになるまで、エクリチュールや痕跡、グランメー、書記素などの概念を保持しなければならない²。

『生死』講義を通して、デリダは明示的にこの仮説と、この仮説を批判的に警戒することの理由とを思い起こし、その検証も行っている。

およそ10年前、『グラマトロジーについて』の、「プログラム」と題された（ちょうど偶然の一致によって、予知だとか、主体をほとんど欠いた目的論であるかのような）冒頭部のある章において、私は以下のことに注意を促していました。引用です。「生物学者たちはエクリチュールとプログラムとを、生きている細胞における情報の最も基本的なプロセスとの関連で語るのである」。しかし、このことはロゴスや、ロゴスの意味論という概念の仕組み全体を、「プログラム」という概念ないしは語に注ぎこむためではありません。そうではなくそれは、遺伝学において非音声的なエクリチュールを要請することが、アリストテレスへの回帰を引き起こすというよりもむしろ、ロゴス中心主義的な機械を脱構築することをもたらし、そうするよう仕向けるのであるということを示そうとするためであったのです³。

² *Of Grammatology*. Translated by Gayatri Chakravorty Spivak. John Hopkins University Press, 1997, p. 9. [ジャック・デリダ『根源の彼方に——グラマトロジーについて』上巻、足立和浩訳、現代思潮新社、1972年、27頁]

³ 『生死』講義の引用は、草稿を参照し、回数とページを表示している〔本論文が公開された時点では『生死』講義は未刊行であったため、ヴィターレは草稿を「第何回講義、タイプ稿でのページ数」で参照しているが、現在同講義が出版されているため、スイユ社版のページ数を参照する。この参照箇所は*Séminaire La vie la mort (1975-1976)*, Les Éditions du Seuil, 2019, p. 44. 以下同様〕。特に断りのない限り、翻訳は筆者のものである。ジャック・デリダの未刊のセミネール『生死』の引用を許可してくれたマルグリット・デリダに感謝する。セミネールは14回構成である。第1回では、デリダがセミネールの導入としてフランソワ・ジャコブの『生命の論理』（1970年）を読み始める。第2回では、ニーチェに焦点を当て、哲学者の人生と彼の著作、特に『この人を見よ』の中で展開された作品との関係に焦点を当てている。ここで問題となっているのは、デリダが出版した著作の中で広く扱っている「自－生－死－伝〔auto-bio-thanato-graphy〕」の問題である。この問題は、

したがって、情報理論、とりわけ「プログラム」や「エクリチュール」といった概念に依拠することはそれ自体、生物学を哲学から解放すること（ジャコブが考えるような、生物学の厳密な科学性）や、生物学的言説への脱構築の影響を認めることにはならない。逆に言えば、これらの概念は、「ロゴス中心主義的な機械」、ひいては西洋哲学の伝統を組織だてる形而上学的な概念性に利するように働きうるのである。アリストテレスにそのルーツを見いだし、ヘーゲルのジレンマを経て発展してきた「生命の哲学」の伝統——遺伝によって無意識のうちに取り込まれた伝統——の枠組みのなかで、遺伝生物学がサイバネティクスに負うもの解釈することは可能であろう。なぜならこの伝統は繰り返しであると同時に進歩でもあり、ある種の進化を伴う変化でもあるからだ。そしてこれはまさに、デリダがこの文脈で再び触れている『生命の概念』の中でカンギレムが主張していることである。

生物学的遺伝がある種の情報のコミュニケーションであるというとき、われわれは、先に出発したアリストテレス主義に舞い戻ってしまう。（……）生物学的遺伝が情報のコミュニケーションであるということは、生き物のなかに書き込まれ、保存され、伝達されたロゴスが存在しているということを意味する。生体は——エクリチュールが存在するよりもはるか前から、書くことなく——、人類が刻むことや書くこと、印刷することでもってしようとしてきたこと、すなわちメッセージを伝達することをしてきたのである。生命科学は、種

言説の対象としての生（神話的生、宗教的生、哲学的生、科学的生、精神分析的な生、文学的生等）と、議論の主題そのものである生命との交錯から生じているということだけを、ここでは述べておこう。この回は『耳伝』に掲載されている。第3回講義の冒頭では、ニーチェおよび比喩の生理学的起源に関する彼の理論、さらに詳しく言えば、『私たちの教養施設の未来について』のなかで、ドイツの学術機関の退廃状態を説明するための比喩のソースとして生物学的な生から借用した現象に頼っていることについても触れている。〔第3回の〕後半では、科学的言説における比喩と概念の対立、特にジャコブの『生命の論理』とカンギレムの『生命の概念』との関係を扱っている。第4回から第6回までのセッションでは、デリダは『生命の論理』の分析に戻る。彼の読解は、生物学、特にサイバネティクスと生物学の関係に焦点を当て、細胞の増殖＝再生産、すなわち生きものの生命にとって基礎となる統一性に対してDNAが果たす本質的な役割が当時発見されたことを出発点としている。この発見のおかげで、生物学は、生きものの生命を制御する論理、すなわち自己再生産の論理を、進化論の枠組みの中で練り上げることができるようになったのである。

の記述と分類から成り立っていたときのように、もはや生命の肖像画のようなものではなく、またそれが単に解剖学やマクロ生理学であったときのように、建築や機械学のようなものでもなくなった。しかし、生命科学はまさに文法に、つまり意味論と統語論に似通っているのである。もしわれわれが生命を理解しようというなら、そのメッセージは読まれるよりもまえにまず、解読されなければならない⁴。

デリダは〔『生死』〕講義の第一回の末尾で、カンギレムの論文が、「生の哲学」の伝統に照らして見た現代生物学の解釈であるという自身の読解を紹介したのちに、このくだりに言及している。

生の哲学、これこそが、カンギレムがこの論文を締めくくっている言葉です。カンギレムはそれ〔「生の哲学」という語、ジャンル〕に反対しているわけではありません。そして、この論文全体が、現代生物学は今なお深い次元でアリストテレス的でありヘーゲル的であるということを示す方向に向いているのであれば、カンギレムはそれ〔生の哲学〕を不当に評価することはないでしょうし、逆もまた真なりです⁵。

とはいえ、以下の点を指摘することは重要だろう。つまり、(1) デリダは、『グラマトロジーについて』の時代に自らが提唱した仮説を検証する必要があると考えている。すなわち、情報理論（特に「プログラム」と「書記＝エクリチュール〔writing〕」の概念）に頼ることは、それ自体が必ずしも脱構築的な効果を伴うものではなく、逆に、科学的な言説の只中で、形而上学的な堆積物を強固なものにし

⁴ Georges Canguilhem, "The Concept of Life." *A Vital Rationalist : Selected Writings from Georges Canguilhem*, edited by François Delaporte, Zone Books, 1994, p. 316. [ジョルジュ・カンギレム「概念と生命」、『科学史・科学哲学研究』、金森修訳、法政大学出版局、1991年、424-425頁。なお、ヴィターレが引用する英訳は、一部原書のフランス語から省略された部分が存在している。本稿では、この引用部はヴィターレの引用する英訳から翻訳している]

⁵ Derrida, *La vie la mort*, op. cit., p. 41.

てしまうかもしれない。(2)この検証プログラムは、とりわけ「プログラム」と「エクリチュール」の概念に関係しているはずである。ここで問題となっているのは、これらの概念〔「プログラム」や「エクリチュール」〕をサイバネティクスから生物学に導入することと、そしてそれらの具体的な使用が正当化のための土台となる根拠を確立する。脱構築のプログラムについては、まず「プログラム」から始めよう⁶。事実ジャコブは、この概念を、生物学で起こった革命において決定的な役割を担っているとしている。情報理論を生命科学に取り入れることによってはじめ、DNAが細胞内部で果たす役割を理解し、最終的には遺伝の起源と構造とを科学的な基礎づけに基づいて記述することが可能になったのである。

今日、遺伝は情報、メッセージ、コードという言葉で記述されている。有機体の生殖〔reproduction〕は、それを構成する分子の増殖〔reproduction〕となった。それは各所の化学物質が自らのコピーを作り出す能力を持っているからではなく、マクロ分子の構造がその細部にいたるまで、遺伝子の遺産に含まれる四つの化学塩基の配列で決定されるからである。世代から世代へと伝達されるものは、分子構造を規定する「指令」、すなわち将来の有機体の建築計画なのだ⁷。

とりわけジャコブの見立てでは、プログラム概念が生物学の分野で用いられるようになったのは、それが常識的に見てすぐに明らかであるとジャコブ自身が考える、生物の二つの特徴を説明してくれるからである。

プログラムという概念は、直観的に生き物に関連づけられてきた二つの概念を混ぜ合わせてしまう。すなわち、記憶と企図〔design〕である。「記憶」〔とい

⁶ ここで私は、“The Text and the Living : Jacques Derrida, Between Biology and Deconstruction.” *Oxford Literary Review*, vol. 36, no. 1, Edinburgh University Press, 2014, pp. 95-114〔ヴィターレ「テキストと生物」、前掲〕への道を開きたい。

⁷ François Jacob, *The Logic of Life : A History of Heredity*, Translated by Betty E. Spillmann, Pantheon Books, 1973, p. 1.〔フランソワ・ジャコブ『生命の論理』島原武・松井喜三訳、みすず書房、1977年、1-2頁〕

う語〕に暗に含まれているのは、遺伝が子のなかにもたらす両親の特徴である。「企図」〔という語〕に暗に含まれているのは、有機体が形成されるのを細部にいたるまで指揮する計画である。これら二つのテーマをめぐる、多くの論争が繰り広げられた⁸。

ジャコブは「獲得形質」についての論争、とりわけ外部環境が影響を与え、後継世代に伝わる突然変異を発生させることで、当の外部環境が一個体の遺伝プログラムを変更する可能性について言及している。ジャコブにとって、これは、「遺伝的」記憶と「精神的」記憶（つまり脳、心、または精神）の間の類比を、素朴で、直感的で、非科学的に利用していることに起因する、ありふれた、非常に古い幻影である。この類比は正当なものであるが、この類比自体が安易に使われると、生物を構造化する遺伝という遺伝子の記憶と、環境に対する個体の振る舞いを規定する神経記憶や大脳記憶とを同一視するという危険な取り違えを引き起こすおそれがある。もしわれわれが、神経記憶の構造的特徴——つまり、環境に由来する所与の獲得、保存、伝達——を遺伝子の記憶に帰するなら、遺伝子の記憶、つまり遺伝プログラムを修正するためにわれわれは外部から介入し、それを修正することができると想定することは妥当なように思われるだろう。ジャコブによれば、プログラム概念の導入によって、正しい使用（遺伝子の記憶と神経記憶の間の類比の、効果的で操作的かつ科学的な使用）を確立することができるという。なぜなら、プログラム概念を導入することは共通の特徴を維持すると同時に、それが生物の進化における二つの異なる特定の段階に対応する限り、〔神経記憶と遺伝子の記憶という〕記憶の二つのシステムを同一視することを避けることができるからである。

現代生物学にとって、生き物を特に特徴づけるものは、過去の経験を保持し、それを伝達する能力である。進化における二つの転回点 [*points de rupture*]——まず生命の出現、そして思考と言語の出現——はそれぞれ、記憶のメカニズムの発生に対応している。記憶とは遺伝の記憶と、脳の記憶である。これら二つのシステムのあいだにはある類比が存在している。両者ともに過去の経験

⁸ *Ibid.*, p. 2. [同前、2頁]

を蓄積し、伝達するように選択されてきたし、両者において記録された情報は各世代で複製されることではじめて存続するのである。しかしながら、この二つのシステムはその本性において、そしてそれらが遂行される論理において異なっている。神経記憶の柔軟性は、神経記憶を獲得形質の伝達に特に適したものにする。そして遺伝の記憶の硬直性は、そのような伝達を妨げる⁹。

類比を超えて——差異

デリダは、ジャコブが検討している類比に、より広範に言うなら、ここで喚起された類比概念そのものに注目している。第一に、デリダの見立てではジャコブは、当の〔哲学的〕概念の正確さや批判的な役割を、厳密に科学的であろうとする言説の安定性や一貫性に対してそのような価値によって起因する結果との関連で考慮していないにもかかわらず、「類比」などの哲学的概念を、決定的で操作的な価値を生物学的言説に割り当てることで、生物学の言説に輸入している。プラトンに起源をもつ類比概念は、形而上学を特徴づける階層化された対立構造（観智的／感性的、シニフィエ／シニフィアン、本来の意味での／転用された意味での、概念／比喩など）と緊密に連帯している。したがって、類比概念はこの構造の内部で動作し、批判的に警戒することなくひとたび採用されると、この概念はシステム全体を強固にするほかなくなってしまう。

問題となっている類比についてジャコブは、〔類比という〕名に含意されるものやその名を選択したことでもって、それがどこへ導くのかを問うてはいません。彼は類比を、二つのシステムのあいだの類似として規定しています（どちらの場合でも、「過去の経験」の蓄積と、その伝達〔が問題となっているからです〕）。しかしこの「類比」という語、がもつ必然性と問題含みなことについてさらに検討するためには、ジャコブのテキストを分析せねばなりません。まずもって、類比はここでは二つのシステムと二つの論理のあいだにあり、かつそれは変数をいくつか持つ複数の項同士の比例関係のシステムです。記憶が（プログラムのもう一つの特徴である企図についてはすぐ後で論じます）、神経

⁹ *Ibid.*, p. 2. 〔同前、2-3頁〕

記憶（脳の〔記憶〕、伝統的な意味での思考や言語）が情報を蓄積し、伝達するのと同様に、遺伝の記憶も情報を蓄積し、伝達します。この関係、この関係同士の関係を、ギリシア人たちはロゴス、そしてアナログアと呼んでいました。ここで二つの関係同士の、つまり二つのロゴス同士のアナログアは、通常の意味での言語ないしロゴスを伴う記憶（神経記憶や脳の記憶は第二の発生に対応しています）と、通常の意味での言語をもたない記憶（遺伝の記憶）とのあいだの関係なのです。遺伝学者〔ジャコブ〕の（メタ言語やメタ言語とされるもののなかでの）本来の意味でのロゴスと、非ロゴス〔a-logos〕のあいだの類比ということです¹⁰。

類比概念に暗に含まれている形而上学的諸前提の脱構築について、デリダが「白けた神話」を参照していることは明らかである¹¹。『生死』講義では、類比概念を取り入れることで生物学の言説にもたらされた結果に焦点を当てている。適切に科学的で、かつ比喩的でない類比〔概念〕の使用を是認するのが、生物学にサイバネティクスを接ぎ木することで実現された発見であるとするれば、遺伝子の記憶は脳の記憶として、ひいては言語として機能する。つまりそれはロゴスの構造と法則に従って機能する。したがってロゴスが生き物——の論理——の合理的な構造を保証するものであるとするれば、カンギレムは正しい。ただしそれは、現代の生物学がサイバネティクスを通じて無意識のうちに、アリストテレスの手になる生命の哲学の遺産と、そしてこの生命の哲学の根底にあり、かつジャコブがそこから自由になろうとしている形而上学的概念とを継承しているときにおいてではあるが。

¹⁰ Derrida, *La vie la mort*, op. cit., p. 35.

¹¹ 類比の脱構築についての正確な分析として、Gasché, Rodolphe. *The Tain of the Mirror. Derrida and the Philosophy of Reflection*, Harvard University Press, 1986, pp. 293-318を参照。とりわけ、「デリダが「プラトンのパルマケイアー」で示したように、類比関係の中で対応しあうことになる関係項同士のあいだに、ある種の支配的で決定的なヒエラルキー化が起こる。このようなロゴス中心主義的なアナロジーによるヒエラルキー化をする権威は、諸関係の関係のなかの一つの項が関係そのものを名づけるという事実によって由来している。その結果、諸関係を作りあげる一切の要素は、全体としての類比関係を名づける構造によって構成されることになる。その名は、究極的にはロゴスという名である」(304)。

しかし、この一般的な類比は、以下のようなとき（すなわち今日）にはじめて可能になったのです。すなわち、科学的だとされる知に関して、非ロゴスが広い意味でのロゴスであると分かっているとき、科学的な知に関して、遺伝の記憶がメッセージの可能な翻訳、メッセージ、コードを用いて言語のよう¹²に作用していると分かっているとき、そして遺伝の記憶が諸々の類比を用いて、言い換えるなら関係の関係づけ（mise en rapport de rapports）を用いて、より正確に言うなら四つの基本要素を用いて作用していると分かっているときです¹²。

遺伝の記憶と脳の記憶との関係がロゴスの秩序に、そしてロゴスから派生した言語についての伝統的な考え——それは情報理論の主要な特徴（プログラム、コード、メッセージ、伝達）の機能をいまだに支配している——にひとたび従属すると、『グラマトロジーについて』で示されているように、プラトンからヘーゲル、ソシュールにいたるまでの形而上学の伝統を特徴づけるロゴス中心主義的な構造を、生物学的な言説へ、その決定的な表現のなかに取り込んでしまう危険性が生じる。特に、ロゴス中心主義的な構造は、それ自身によって構成されたシニフィエ——すなわち、ある種の自己性〔ipseity〕（魂、主体、意識、脳）の中で生産されたシニフィエであり、したがって、その伝達を担当するシニフィアの物質的な外在性から自律し独立したシニフィエである——の外部伝達の単純な手段として記号を規定することを伴う。

記号論的コードに基づいて規定されたロゴスやメッセージそしてコードとは何かを問うことなく、一度この類推が受け入れられてしまうと、以下のように自問するかもしれません。つまり、主体を、ジャコブが「プシュケーの意図」とここで呼んでいるものを消滅させるのに十分であるかどうか、と。「プシュケーの意図」、それはメッセージ、翻訳、計画、目的といった価値が、ロゴスのシステムつまりは伝統的なロゴス中心主義から密輸するものを逃れるために、一切の伝統的な神学的摂理を戯画化した定式なのです¹³。

¹² Derrida, *La vie la mort*, op. cit., p. 35.

¹³ *Ibid.*, p. 36.

デリダによる読解が問題にしていることの一つはまさに、形而上学的言説の脱構築的な含みを強調するために、生物学的言説を形而上学的言説の秩序に結びつけていた縛りから解放することの可能性である。デリダは、遺伝の記憶と神経記憶の間の類比的分析をさらに進め、それによって後者が不安定で厳密さを欠いているということが、全くもって構造的な理由から、類比的なものを用いることで、それを見るのを妨げられてしまうような解釈の可能性が除外されてしまうことの兆しであることを示す。デリダによると、ジャコブが定式化しているような類比的は誤って構築されている。すなわち、二つ以上の項目——実体または実体間の関係——の間の類比的が確立されるためには、それぞれの項がそれ自体によって構築され、他の項から独立に規定される必要がある。遺伝的の記憶と神経記憶の差異についてジャコブが主張しているように、類比的関係にある項のあいだに、質的かつ本質的な区別、つまり本性の差異を認めることが必要となる。しかし、ジャコブが提唱した類比的の第一の規定は量的なものであって、質的なものではない。すなわち、二つの記憶システムは、その本性や本質によってではなく、柔軟性や硬直性の多寡によって異なっている。このことからデリダが導き出す帰結は重要であり、かつジャコブの意図をはるかに超えるものである。「われわれはもはや、二つの厳密に不連続なタイプに取り組んでいるのではなく、同じエコノミーの二つの中継に取り組んでいるのです〔……〕それゆえ、類比的は単に異なるもの同士の類比的であることさえもはやなく、同質性の境位における類似なのです」¹⁴。遺伝の記憶と脳の記憶のあいだにただ経済的なないし量的な区別があるとすれば、その類比的は根拠のないものであるだけでなく、二つの異なる分節化が同じ秩序の中にあることを認識する必要がある。つまり、一般的な記憶システムは、生き物の生命の発生と進化を構造づける〔経験の〕習得、保存、および伝達のシステムとして理解されているということである。もし、それらが同じ秩序に属する現象であるならば、それらの質的な対立を、換言するならば本性や本質の差異を排除する必要があるだけにとどまらない。加えて、二つの記憶の間には、それらの規定のなかに暗に含まれている関係があり、したがって、二つのシステムは、一方が他方に外在的なものではないという仮説を立てることも正当となる。すなわちそれらは、一方が他方から独立して規定されるようなも

¹⁴ *Ibid.*, p. 37.

のではないが、それらの間には進化の関係が存在しており、それゆえに、一方——神経記憶——は、他方——遺伝の記憶——の条件に応じて構築される生物の進化の過程において生じた、種的な発生である。ここから以下のような仮説に繋がる。個体の精神構造としての〔神経〕記憶は、遺伝の記憶、つまり生き物の論理を司るプログラムの進化の産物であり、最終的には、自然（遺伝の記憶）と文化（脳の記憶）のあいだには、ジャコブが立証した類比が前提するような連続性があり、両者は断絶していない、という仮説である。

ここで私は、いかなる文化的現象も、人間の生命＝生活を構築し、特に脳を構築する生物学的進化の条件に引き戻されるべきであるとする、厳密に決定論的な生物学主義を信用しようとはしない。デリダの見立てでは、遺伝の記憶と神経記憶のあいだの差異による関係を考えることは可能であり、その結果、差延の力学を、生き物の生命とその進化の歴史の一般的条件として明確にすることができるのである。

私としてはここにまさに一つの進歩を見たのでしょうか、人間主義的〔humanist〕であったり、唯心論的〔spiritualist〕であったり、一般に形而上学的であったりする、最も反啓蒙主義的なイデオロギーを支えてきた境界の排除のうちに。暗々裏の形而上学が真正であることを証明するような、伝統においてロゴスや類比という価値に結び付けられているものが力強くそこに回帰してくるのを避けるべく、類比のロゴスについての問いが批判的な仕方では解明されていたとしたら、私はここにまさに一つの進歩を見たのでしょうか。先取り的に、いささか晦渋に、以下のように言います。境界や対立（例えば一方では純粹に遺伝的なもの、他方では直立姿勢からロゴスを持った生き物〔zoon logon ekhon〕、そしてそれに続く一切にいたるまで、大脳のものの大いなる創発が見出されるような、二つのタイプのプログラム）を吹き飛ばす、それゆえ同質的なもののためでなく異質性ないしは差異性のための余地を残すべく、この対立を吹き飛ばす境界－画定＝境界－除去〔de-limitation〕を支持します。というのも、〔このセミネールを〕始めるときにもほのめかしていましたが、対立の働きにはつねに、差異性を消去するという効果があるからです。彼岸〔au-delà〕および〈彼岸への一歩＝彼岸はない〔pas au-delà〕〉という名目で私が関心を寄せてい

るのは、いみじくも対立と差異との、対立なき境界なのです¹⁵。

デリダが進化について採用している視点は、記憶の装置の発生の進化を記述する枠組みにおいて「原エクリチュール」という概念を練り上げるにあたって彼が影響を受けたルロワ＝ゲーランのそれと非常に近いようだ。すなわち、遺伝のプログラムから、個体の心的構造としての記憶を経由してエクリチュールにいたる、という道筋である¹⁶。しかし、デリダの考えでは、差延が生命の歴史を統制するものである以上、進化は、差異化し／遅れる〔differential/differing〕プロセスとして考えられるべきである。そこでは差異化のプロセスの各段階は、当のプロセス自体の条件について、分節化と差異を伴う反覆〔iteration〕¹⁷の効果の双方からなる、相互に独立し、かつ明確な〔進化の〕発生に対応している。したがって、デリダの見立てでは、進化は（それが目的論的なものか否かにはかかわらず）直線的で連続したプロセスではなく、〔進化における〕飛躍や還元不可能な断絶を要請しないのである。ここで採用されている仮説は、「決定論的」でも「還元論的」でもなく、形而上学－ヒューマニズム的なものでもなく、ロゴス中心主義的なものでもない。遺伝的なものと象徴的なもののあいだには、自然と文化のあいだには、同一性でも対立でもなく、差延がある¹⁸。

¹⁵ *Ibid.*, pp. 37-38.

¹⁶ この影響関係については、Vitale, “Via rupta : vers la biodeconstruction,” in *Appels de Jacques Derrida*, edited by Danielle Cohen-Levinas and Ginette Michaud, Hermann, 2014 を参照。また、Leroi-Gourhan, *Gesture and Speech*, translated by Anna Bostock Berger, MIT Press, 1993〔アンドレ・ルロワ＝ゲーラン『身ぶりと言葉』荒木享訳、ちくま学芸文庫、2012年〕も参照。

¹⁷ 〔訳注〕デリダは反復する可能性があるもの——例えば言語、署名など、さらに一般化すれば記号やマーク——はつねに他の文脈でも引用されうるものとして捉えており、そのような可能性がなければそもそもありえないと説く。そして差異を伴って反復されることを、単なる反復（répétition）ではなく、反覆（itération）と表現していた。ここでも、進化の過程での遺伝コードの差異を伴った反復を指している

¹⁸ 一方で、ここで提示される仮説は、デリダを注意深く読んでいる者であれば驚くようなものではない。それは、「差延」論文の中で練り上げられたプログラムと関係している。「哲学はもろもろの対立カップルにもとづいて構築されており、我々の言説はそうした対立カップルを糧にして生きているが、そうしたあらゆる対立カップルは見直されてもよいだ

他のテキストで私は、この「差異に基づく」テーゼを〔『生死』〕講義の内外にまで辿り、その一貫性と意味合いを脱構築的な視点で検証している。ここでは、プログラムという概念の分析と、遺伝の記憶と脳の記憶のあいだの類比の脱構築とを進めていく。

デリダは、質的な性質を持つ、別の際立った特徴を考慮に入れている。それはより厳密であり、それゆえに、記憶の二つのシステム間の対立と、〔両者の〕類比関係を確立する可能性そのものを正当化することができるように思われる。ジャコブにとって、遺伝の記憶と脳の記憶は、外部との関係において異なる。脳の記憶が外部に開かれ、その修正を受けるのに対し、遺伝の記憶は外部の作用を受けつけない。「事実、遺伝のプログラムは本質的には不変の要素の組み合わせ系から成り立っている。まさにこの構造によって、遺伝のメッセージは外から働くいかなる干渉をも許さないのである」¹⁹。より仔細に検討すると、それは当てはまらない。つまり、遺伝の記憶が環境の作用を受けつけないことを肯定することは、進化にとって本質的な選択の可能性を否定することになる。ジャコブにとって、二つのシステムは、環境に対する開かれと閉ざされによって対立しているのではない。そうではなく両方とも外部に向かって開かれているのだ。両者の対立は、環境との関係に関係している。脳の記憶は、意図的な目的を持って、直接的、意識的、志向的な方法で作用し、したがって、その行動を修正することができる。だが遺伝の記憶が受ける修正——自然淘汰と環境とが事後的に介入するいわゆる突然変異——は、偶然かつ偶発的であり、直接的な因果関係を欠いている。

ろう。するとそこに見えてくるのは対立の消去ではなく、ある必然性の告知だろう。すなわち両項のうちの一方が他方の差延として現れるといった、つまり一方が同じもののエコノミーにおいて差延された他方として現れるといった、そうした必然性の告知だろう。感性的なものを差延するものとしての、つまり差延された感性的なものとしての叡智的なもの。差延された——差延する——直観としての概念。差延された——差延する——自然としての文化。差延されたピュシスあるいは差延するピュシスとしての、ピュシスのあらゆる他者——テクネー、ノモス、テシス、社会、自由、歴史、精神等々。差延のうちに^レある^レピュシス」“Différance,” in *Margins of Philosophy*, translated by Alan Bass, University of Chicago Press, 1982, p. 18. [ジャック・デリダ「差延」、『哲学の余白』上巻、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年、59頁]

¹⁹ Jacob, *The Logic of Life*, *op. cit.*, p. 3. [ジャコブ『生命の論理』、3頁]

生体やその集団の変異にあずかる化学的、力学的な現象すべては、どんな結果を起こそうが、一切お構いなしに進行する。それらの結果は、適応しようとする生体の要求とは何の関係もなく起こる。〔……〕各個体にとって、プログラムは全く偶発的な事象の一連の断続^{カスケード}の結果として生ずる。遺伝コードの性質そのものが、個体の行動や環境の影響によるプログラムの故意の変更のすべてを妨げている。それは、自分の表現から生まれる産物のメッセージにいかなる影響が及ぶのも禁じている。プログラムは経験の教えを受け入れないのである²⁰。

しかし、ジャコブは『生命の論理』の別の時点では、間接的であっても、遺伝子プログラムが「経験から学ぶ」ということを認めざるをえなくなる。偶発的な出来事によるプログラムの変異は、生殖の可能性に影響を与える環境条件により良く適応する変異により有利に働く自然淘汰をつねに受けなければならない。

選択という考えそのものは、生物の本性のなかに含まれており、生物は増殖する限りは存在するという事実のなかに含まれている。突然変異の働き、組換えと付加の働きによって、新しいプログラムを担うようになった新しい個体は、ただちに増殖の試練に掛けられることになる。もしこの整体が増殖することができないと、それは消滅する。もしそれが同種のものよりももっとよく、もっと速く増殖することができると、この有利さはいかに小さくともただちに繁殖に、したがってこの特殊のプログラムの拡まりに好都合になる。結局、核酸の原文が環境によって規定されているように思われたり、過去の経験の教訓が正しいにはそこに書き込まれるようになるのは、増殖における長い回り道を経ているからである²¹。

デリダはこの対立がまたしても十分厳密ではないという。精神分析や言語学、記号論、人類学などの近代の構造主義的学問が示しているように、ジャコブが遺伝の記憶だけがもつ際立った特徴として主張しているものは、脳の記憶にひいては言語の

²⁰ *Ibid.*, p. 3. [同前]

²¹ *Ibid.*, p. 292. [同前、289頁]

領域にまで拡張することが可能なのである。脳の記憶、つまり個体の^{フシケ}精神は、コードとプログラム（言語学－記号学的、社会的、宗教的、政治－制度的、経済的なコードとプログラム等々）に強く結びつけられている。これらのコードやプログラムについて、志向性や意図が介入するための余地は非常に狭く、偶有的なものである。プログラムは、個体の意識の限界をなおもはるかに超えており、したがって、個体の行動や意図の可能性をはるかに超えている。意識とは確かに原因というよりもむしろ効果である。それは、遺伝のプログラムを定義するために、自分の意識的な意図とは裏腹に、自らがそこから解放されていると信じていた伝統的な哲学の道具立てに頼らざるをえないジャコブ自身の場合においてもそうなのである。

加えて、因果関係の異質性、プログラムの変化の確固たるものではない特徴、要するにシステム内部の主体を因果性の無意識的な効果という状況に置く一切のもの、外部から到来する行動と、システム内部の変化のあいだの偶然的な効果を生み出す一切のもの、こうしたことはすべて遺伝的プログラムと同様に非遺伝的プログラムも特徴づけています。システムや遺伝プログラムの外部では、プログラムの変化が確固たるものと、本質的に確固たるものだという着想にジャコブはどこで至ったのでしょうか。（人類を最上位とする）上部の、ないしは象徴的なプログラムを意味から、意識から、内部／外部や客観性／非客観性のあいだの境界線を知っていることから規定する、そんなイデオロギー的で形而上学的な対立を描いて、他のどこでそのような着想に至ったのでしょうか。〔……〕さて、今日構造的だとされる諸科学から得られるものが存在するなら、それは以下のように断言しうる可能性のことでしょう。つまり、言語や象徴的なもの、脳の記憶等々に結びつけられる諸々のシステムはまた、熟慮と意識を免れ、外部から到来する効果を、偶発事や異質な諸力と同様に知覚せしめるような、内部で調整される内的機能をも持つという事です。この異質な諸力は、内的なコードのなかで支配しようとしたり、「変異」が生じるほどまでに支配に失敗しそこねたりしつつ、このコードにおいて解釈し、翻訳し、当のコードに同化させねばならないでしょう。そしてこの諸力は、いかなる形式をも取り得るものの、〔遺伝コードを〕再構造化するのを余儀なくするような、

外部からの暴力的な闖入をつねに知らせてもいるのです²²。

デリダは、ジャコブが主張した遺伝プログラムの硬直性それ自体を象徴的なプログラムに帰することによって、非常に決定論的なテーゼを擁護しているように見える。しかし、議論の明らかに逆説的な結論が証明しているように、その逆もまた真なりである。つまり遺伝プログラムと象徴的なプログラムという二つのプログラムは、それらの生殖＝再生産〔reproduction〕に鑑みるなら、内部を調整する異なる原理に基づいて機能しているのだ。この〔遺伝プログラムの〕硬直性は、外部に開かれることの余地を与えない、というものではない。そうではなくむしろ、以下のような含みがあるのだ。すなわち、双方のシステムにはともに、外部から到来するものに影響を受け、修正される必要性があり、したがって、外部から到来するものを、システムの再生産＝増殖〔reproduction〕が要請することに照らし合わせて解釈する必要性があるということだ。外部から到来したものは、それが危険であると解釈されたら、単にプログラムから拒否されるし、システムの存続に有用であると解釈されたら、同化され、保存され、したがってまた送信される可能性がある。このことはプログラムが遂行されるのを司るメカニズムの修正を引き起こす可能性があるのだ。最終的には、それはプログラムの修正、ひいては真の変異を引き起こす可能性さえあり、これは象徴的なプログラムにも遺伝プログラムにも作用する。どちらのシステムも共に（外部に開かれ、その偶発性を解釈するために要請されるほどに）ある程度は偶有的であるために、両システムともに簡単には制御できないような効果を持っている。しかし注目すべきことは、デリダにおける暗黙のテーゼは、先に引いたくだりのなかでジャコブが定式化している、当時の生物学の根本原理のうちの一つ「プログラムは経験の教えを受け入れることはない」²³と矛盾している点だ——デリダの見立てでは、遺伝の記憶と神経記憶のあいだには遺伝／差別的〔genetico/differential〕な関係があり、それは両者〔の記憶〕が発生するための共通の条件であり、発達の異なるレベルを通じた具体的な分節化である差延に起因しているのである。先の根本原理を言い換えるなら、遺伝子の変異は、或る個体が生

²² Derrida, *La vie la mort*, op. cit., p. 40-41.

²³ Jacob, *The Logic of Life*, op. cit., p. 3. [ジャコブ『生命の論理』、3頁]

きる環境によって引き起こされることなどありえない、ということである。

脱構築からエピジェネティクスへ

デリダが自らの立場を練り上げていた当時、その立場は素朴なラマルク主義として一掃されていたことであろう。そしてこれこそが、このセミナーがこれまで出版されていない理由の一つかもしれない²⁴。しかし、今日の生物学の現状は大きく異なっている。とりわけ、革新的な妥当性を持ち、デリダのテーゼと一致するような研究がなされたのである——もっとも、デリダのテーゼが理論的な見地から、当の研究を予見し、正当化するものとして読まれるかぎりにおいてだが。私が言及しようとしているのは、エピジェネティクスという、遺伝子と環境——遺伝子の内部（細胞環境）であれ外部（われわれが通常環境として理解しているもの）であれ——の相互作用を研究する学問分野において、最近行われている研究である。この研究は、生物学的言説の秩序のうちに根本的な変異を引き起こし、それゆえに生き物の論理とその進化についての解釈にも変異を引き起こしている。特に、今日の個体の構造が構築されときの遺伝プログラムの役割は、かつてほど決定論的ではなく、究極的には〔経験や獲得形質の遺伝を〕排除するものではないように思われる。個体の構造は、もはや細胞内で遺伝プログラムが厳密に実行されることによる排他的な結果ではなく、むしろ、遺伝子と、その遺伝子が刻み込まれて、個体の機能の発現について遺伝子が依存している細胞環境とのあいだの相互作用にかかっているのだ。とりわけこの発現は、一連のエピジェネティクスの調節（メチル化、RNA干渉、ヒストン修飾、ゲノム・インプリンティング）を受ける。そしてそれらは、場合によっては、汚染だとか食物が不足したり過剰にあったりする状況に曝されるというような個人の外部環境要因に依存するだけでなく、実の親によるケア

²⁴ 〔訳注〕ジャン＝バティスト・ラマルクは、生物の進化において、当の生物がよく使う器官は発達し、そうでない器官は退化していくという進化論をとっていた。ヴィターレの読解ではデリダもまた遺伝の変異が経験によって生じる可能性を構想しており、有機体の生涯のうちに経験したことが遺伝するという、獲得形質の遺伝の考えと軌を一にするものとして「ラマルク主義」の一種としてみなされた可能性を示唆している。なお、周知の通りこのヴィターレの論攷が出版された後の2019年に、『生死』講義がスィユ社から発行されている。

が欠如していることや戦争のトラウマのような社会的・文化的次元での心理的なストレス要因に依存することもある。いくつかのエピジェネティクスの規制は、個人の遺伝プログラムが再構築されること（これを「リプログラミング」と言う）を引き起こす可能性さえあり、その再構築は場合によっては次の世代に伝達され、その結果、遺伝性を持つかもしれないのだ。この点は明らかに決定的である。それはまず、このことによってジャコブに対してもデリダに対しても、「プログラムは経験の教えを受けいれる」と断言できるようになるということだけではない。加えてより一般的な視座から見ると、これらのエピジェネティクスの調整が進化の、つまりわれわれが先に検討したように、個体ではなく集団に影響を及ぼすような選択に帰すると一般的にされてきた遺伝子の変異の本質的な要因であるという仮説を正当化するものでもあるからだ。換言するなら、この特徴は、集団規模で刻まされた遺伝子の突然変異が、遺伝プログラムが転写される際の誤りだけに起因するものではないという仮説を正当化するものであり、それはより適応しうる突然変異が選択されるときにのみ介入してくる環境要因とは独立になされるものである。実際、これらの突然変異は、特定の外部環境因子または内部環境因子にさらされた単独の個体におけるエピジェネティクスの適応であるかもしれないのだ。

私の主張を裏打ちし、この研究〔エピジェネティクス〕の妥当性をより深く理解するためには、リチャード・C・フランシスが『エピジェネティクス——遺伝の究極のミステリー』で提示した素晴らしい結論から引用するのがよいだろう。彼が明らかにしているのは、遺伝プログラムは、それがどんなに重要であっても、細胞の分化や生物の有機構成を決定する細胞同士の相互作用の一要素にすぎないということである。このプログラムは、生き物の厳密な構造を規制する排他的な原理を表しているものではないだけにとどまらず、内部環境や外部環境による突然変異が起こりやすいものとなっているという。

遺伝子の振る舞いがもついくつかのエピジェネティクスの変化は、個人の寿命をも超えて影響を及ぼす。これらの世代を超えたエピジェネティクスの変化の影響は、直接的なものであったり、間接的なものであったりする。直接的なものが起こるのは、エピジェネティック・マークが親から精子や卵子を介して子孫に直接伝達される場合である。これが「真のエピジェネティクスの遺伝」と

私が呼ぶところのものである。真のエピジェネティクスの遺伝はわれわれのような哺乳類では一般的ではないが、実際に発生するのである。間接的な、世代を超えた効果の影響の方がはるかに一般的なのである。[……] 母体の行動と子供のストレスへの応答のうちに見られる、世代を超えた効果の方がはるかに間接的である。ここでは、そのような行動に影響を与えるエピジェネティクスの変化は、これらの振る舞いがそれに対して影響を与え、かつ当の振る舞いがそれによって影響を受けているという社会的相互作用を介して作り直されている。この世代を超えた影響は、遺伝子の作用と社会的相互作用をも含む、正のフィードバック環である。直接的なものであれ、間接的なものであれ、これらの世代を超えたエピジェネティクスの影響は、われわれの遺伝概念を拡大するはずである²⁵。

ここで述べられていることは、カトリヌ・マラブーによるテーゼを掘り崩すのに十分なものであると私には思われる。つまり、デリダの「エクリチュール」という概念が、サイバネティクスによって練り上げられ、生物学によって実装された「プログラム」という概念と密接に結びついており、それゆえに今日ではエクリチュールなる観念はもはや時代遅れなのだから、支持しえないものとなってしまった、というテーゼである²⁶。しかし、プログラムを脱構築しようとしている痕跡、特

²⁵ Richard C. Francis, *Epigenetics : The Ultimate Mystery of Inheritance*. W.W. Norton, 2011, p. 159 [リチャード・フランシス『エピジェネティクス——操られる遺伝子』野中香方子訳、ダイヤモンド社、2011年、185-186頁]

²⁶ マラブーの『エクリチュールの暮れ方の可塑性——弁証法、破壊、脱構築』の以下の記述を参照。『『生命の論理』は、存在者の言語的構造が存在していることを、エクリチュールがその内部で果たす役割を特権視することで、裏づけている。[……] このグラフ存在論において、根源は——この語に与えられている意味がどのようなものであれ——痕跡との関連でのみ、すなわち自己との差異との関連でのみ思考されうるのだ。一般的に、このプログラムという概念——明らかなことだがそれはサイバネティクスの分野の概念でもある——こそが、思考の運動図式としてのグラフ図式の構成を最高潮に至らせ、完成させるのである。ひとりデリダが、この〔プログラム概念による〕完成と最高地点への到達の重要性を認めていたのである。[……] デリダはここ『グラマトロジーについて』の劈頭で、エクリチュール概念の意味論的な拡大を、プログラムや情報やコードというモチーフの持つ意味の豊かさから出発して、恣意的で哲学的な決定としてではなく、一つの出来事、新

にその決定論的な特徴を脱構築しようとしている痕跡は、『散種』のような既刊のテキストのなかにすでに見出すことができる。

種子の異質性・絶対的外部性である種子的差延は、みずからをプログラムへと作り上げるが、しかしそのプログラムは形式化できないものである。形式化できるいくつかの理由によって。差延のコード——つまり差延の破裂——の無限性は、百科全書の円環における自己への現前の飽和した形式をとらない。その無限性は、コードの代補 [d'un supplément de code] の絶えざる失墜に起因する²⁷。

ここきてデリダの分析の目的は明らかになった。ジャコブによって定式化され、サイバネティクスによって輸入され、生き物のただなかに移植されたプログラムという概念の定義は、その根本的なロゴス中心のかつ人間主義的遺産でもって、形而上学のプログラムによって、無意識のうちに重層決定されているのである。

ここでもまた、ご覧いただけるように、二つのプログラム同士の対立は厳密なものたりえないのです。このことは、プログラムなる一般的概念と類比という価値を練り上げ直さなかったがために、二つのプログラムが、ロゴス中心主義的な目的論と、人間主義的な意味論、私が生の哲学と呼ぶところのものによってしづけられたままであるということに由来しているように、私には思わ

たなる秩序の出現として記述している。エクリチュールが、哲学的な運動図式としてそれ自体を構成することができた時代を意識するようになるのは、他ならず現実のこのプログラムの組織化に基づくことによるのである」(Catherine Malabou, *Plasticity at the Dusk of Writing. Dialectic, Destruction, Deconstruction*, Translated by Carolyn Shread, Columbia UP, 2010, pp. 57-59)。また、“The End of Writing. Grammatology and Plasticity.” *The European Legacy*, vol. 12, no. 4, 2007, pp. 431-441 [カトリヌ・マラブー「グラマトロジーと可塑性」西山雄二訳、『思想』第1088号、2014年、242-261頁]も参照。

²⁷ Jacques Derrida, *Dissemination*. Translated by Barbara Johnson, University of Chicago Press, 1981, p. 52. [ジャック・デリダ『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013年、78頁]

れるのです²⁸。

Francesco Vitale “Reading the Programme : Jacques Derrida’s Deconstruction of Biology”, in *Postmodern Culture. Journal of Interdisciplinary Thought on Contemporary Culture*, vol. 28, No. 3, May 2018.

Reprinted by permission of Francesco Vitale.

訳 = 吉松寛（立命館大学客員協力研究員）

²⁸ Derrida, *La vie la mort*, *op. cit.*, p. 41.

